



電話 取ると若い男の声で、「リュウセン(?)さまですか?」そつだとそのまま返事をすると、「ご主人さまは高麗川ゴルフのメンバーでいらっしゃいますネ」あ、これはゴルフ会員権を売らないかの勧誘のはなしだなと思い、当分処分する気のない旨を先回りして答えた。するとそれを遮るように、「イエ、ゴルフの会員権のことではありません。私どもは金の売買を扱っておりまして・・・」なんだ、金の売買か。金にも関心がないとかさねて断った。同時に、変だなとふと思った。何故ゴルフの会員権が金の売買につながるのだらう。そこで訊ねてみた。「実はゴルフの会員権をお持ちの方はみなさま裕福でいらっしゃいますし、それなら金の売買につきましても・・・」私は電話口で思わず笑ってしまった。金持ちど

ある日の勧誘電話

ころか、長年団地にすみついでいて、金の運用など考えたこともないヨ、と幾分口調を和らげて諭すように説明した。相手は恐縮した風に、「どうも失礼致しました。万一場合は是非とも・・・」と念を押して電話を切った。そうか、ゴルフの会員なら金の売買の話もきつと商売になる、という持って回った発想は、これは懸命に頭を捻った、世馴れない若者の智慧だろうが、なるほどと納得した。

数日後、差出人の心当りのない手紙が届いた。ハテと封を切ると、先日の電話の主からの思いがけない手紙だった。短い文面をそのまま引用する。「本日は御多忙の折、誠に有難うございます。わずかに数分の電話での会話でしたが、大変嬉しかったです。元より口下手で、お聞き苦しい点あったとは存じますが、これからも勉強してよくしていきたいと思っております。寒くなりませんが、御身体お気をつけになって下さい。敬具」先日の

電話のとき、うけた若者の実直そうな印象から好感を抱き、その折り私の話したことが自然に相手に通じたものだろうが、彼は電話のあと、早速アフターケアで書いてよこしたものに違いない。この手紙にしても幼い字体だったし、文面も決して書き馴れたものではないが、一字一字丁寧に書いてあり、封筒や便箋も、社名のない私用のものだった。その若者は、入社して何年位だろうか。リストラの波の中を必死に自分の仕事を守ろうとしているのだらう。そんな覚悟も文面から見えた。私は甘いのかもしれないが、見知らぬ若者からのこの短い手紙に、私はいつとき爽やかな気持ちを感じた。もう一昨年にもなる。11月終り近いある日のできことだった。

泣き虫
怒り虫



サバの小学校(サナワリア村)

達する。この増加分の90パーセントは発展途上国で占めることが予測されているが、問題は今後如何にしてこれらの国々で食料を確保するかである。筆者が30余の発展途上国を回った限りでは、根幹を担う農業の前途に明るい兆しは些かも感じ取れない。その最大の阻害要因の一つは、焼き畑農地の「土壌劣化」である。日本のように「農業とは土作り」の考えがなく、焼き畑栽培は栽培後10年近くの休閑期間を置けば、地力は自然に回復するためこの慣習が定着している。ところが人口増で食料の需要が伸び、この休閑期間を短縮せざるを得ない状況に追い込まれるに従い、農作物の収穫量は減少の一途を辿る。

現在、私共のNGO「サバ」西アフリカの人達を支援する会」は、西アフリカの農村で上記の貧困の解消策として、森林の再生植林と劣化した農地の「土作り」を主要活動テーマとし、現在ギニア共和国の山村で住民達と共に活動を実施している。住民達は、かつて繁茂していた豊かな森林が彼等に「衣・食・住」をもたらしていた恩恵を覚えており、サバの森林の再生植林の呼びかけに活動の主役として精力的に心えている。更に、サバは日本の伝統有機肥料「堆肥とボカシ肥」の生産技術指導を行い、安価なこれらの有機肥料で劣化した焼き畑土壌の活性化にも取り組んでいる。

同期の友人達との会合では、戦中、戦後の食糧難の話題が多いが、遠い過去の事例は時代と共に風化しつつある。しかし、同じ地球上で繰り返して発生している貧困を見過ごすことは、いつの日か私達にも再び降りかかる可能性を否定することにつながる。西アフリカから発信されているものは何か、私達が今問われている。

メールボックス

百周年に向けて

佐竹真一（41回生）



昨年、母校は目出度く80年のお祝いをすることが出来た。人間で言えば、傘寿を迎えた訳で、多くの孫や曾孫に囲まれる幸せを味わうことだろう。多くの卒業生が様々な分野で活躍する姿や在校生連の日常の姿を、傘寿の母校はどんな気持ちで見守っているのだろうか？

母校には、礼節を重んじ、個性を尊重し、自由闊達を旨とする校風があり、多様で優れた人材を多く輩出する風土となってきた。卒業生名簿には、実に多様な活動分野を見出すことが出来る。僅かに国家公務員上級試験を経た分野が少なくないかな、と思わせる程度である。これは、開校記念碑文に謳われた理想が、この80年間、嘗々と受け継がれ、多くの卒業生の人生に結実し

たことを意味している。

建物には、どの様な人が其処に住み、其処でどの様な営みをするかによってその値打ちが決まるという。41回生の私が在学中は、「チリ一つないボロ校舎」を誇りとする時代だった。戦災によって灰燼に帰した校舎を、戦後間も無く父兄、教職員、生徒が一丸となって再建した校舎に学んだこともある。再建のなった秋の運動会で、校庭に残された建築資材（ナル）を活用して応援席を作り、花を添えたのが「名物」櫓の始まりであることとを、中1の運動会でそこに座って学んだ。

喩え、毎日通う校舎に時計台はなく、夏に赤い風が降ってくる教室があり、夏冬逆転の冷暖房が完備する「ボロ校舎」であっても、此処には素晴らしい人々の営みがあることが判ってきた。開校記念碑文に盛られたこの学校の理想に、人材の輩出ということがはっきりと謳われていることも知った。川崎・宇田の両氏の理想によって創建され、報恩感謝は、先ずはこの両氏に

向けられるべきものであることも知り、この理想に共鳴して精励されて来た先生方や父兄が多くいることも知っていた。

「人材」とはなんだろう、と考え始めたのも中学の頃だった。「進学校」と受験校の違いについて、先生方と激しく議論したこともあった。高校になって、理系・文系とクラス分けをすることについて、自分達の学年を分断する気が、と捻じ込んだこともある。受験準備の障害となるからとして、「名物」櫓作りの活動を制限しようとする先生方の動きを察知していた先輩達とともに、1年掛かりで、生徒会を中心にストライキ態勢に転換出来るような「櫓委員会」を組織したこともあった。運動会を前にして、30名近い櫓委員全員が、校長室へ、主立った先生方と対峙したが、卒業生でもある曾我部校長先生の裁断で決着した。

こんな生意気な生徒達とのやり取りを許容出来るような懐の深さや見識の高さが先生方にあったのは、今から思えば、とても幸運なことだった。ダイヤモンドを磨くには金剛砂しかないように、人材を磨

き上げるのには人物しかないと言う。母校で出会えた先生方の中には、多くの個性的な「人物」がいた。これは、どの卒業生達にも共有されている経験であり、その後の人生の貴重な財産ともなっている。

生徒達の間の切磋琢磨も重要だった。成績が良いばかり、遊びに長けているだけ、部活動に成果を上げるのみ、それだけでは一人前と認められない風潮があり、個性のぶつかり合いが起こっていた。お互いを労わり合う心も育まれた。困難ではあったが、勉強と遊びの切り替えが出来なければ、仲間と楽しい時間が過こせない雰囲気があった。文武両道が毎日の生活の中にあっただ。

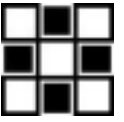
一生涯の友人達が、こつした交流の中で生まれ、育まれていった。

最後の海軍大将の一人、井上成美が、海軍兵学校の校長であった時、軍事学に傾斜する時代の大きな圧力に逆らって、普通学に力を入れ、英語教育を続けたことや、海軍は出世主義ではないとして、講堂に掲げられた大将の肖像を悉く取り去らせたことは、日本の教育のあり方に大きな教訓を残している。

母校に於いても、受験技術に傾斜する圧力に抗して、独創に繋がる粘り強い思考力を養い、異文化を乗り越える自己表現能力を培い、多様な才能を育んで、多くの先輩達を乗り越える人材を輩出してゆく方策を、改めて見直す好機にあるのではないだろうか？

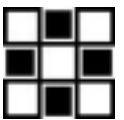
多様な人材は、時代の激動期には殊に必要なのであり、長期的な視野で社会建設を行う上でも欠くことが出来ない。21世紀の初頭に立つ日本は、国際社会に重きをなす存在でありながら、激動を伴う社会変革の途上にあり、また、国家百年の大計を樹立する必要に迫られている。

母校に80周年を機として、来る百周年を描き出そうとする動きがある。ある時点の教育は20年を経てその成果を問われ始めると言いが、来る20年間に、新たに7千名を超える名前が卒業生名簿に加わる。この中に、多様で優れた人材をどれだけ多く織り込み、未来の要請に因應するか、と言う挑戦に取り組もうとしている。これに因應する方策の策定に、関係者が挙げて関心と協力を寄せ、輝かしい百周年に結実させてゆきたいものである。



筆三十一号記念

歴代編集長思いのびを語る



昭和60年に創刊号が発行されて以来延々16年、編集委員各氏の努力と同窓会員諸氏の協力のもとに土佐中高同窓会関東支部機関紙「筆山」は発行を続けて参りました。今号で30号の節目を迎えるに当り、歴代編集長の一言を取材して参りました。惜しくも平成12年3月に逝去されました戸田二代編集長には、岩村特派員が天国まで出張してお話を聞いて参りました。



初代編集長小松毅津子(35回)

茫茫

土佐中・高等学校同窓会関東支部の活動を活発化させる核にしようと、機関紙「筆山」が創刊されたのが一九八五年。私は創刊号から8号までの4年間、編集長をさせていただいた。

思つとところあつて、数年前、定年より数年早く退職し、霞を食べて暮らしているせいか(でも、なぜか太る)、記憶

は茫茫。当時は仕事のほうも超多忙で、やたら風邪ばかり引いていたように思う。飯田橋の「白ゆり」というレトロな喫茶店に集まり、浅井伴泰・窪田秀忠・岩村康生・吉井雄一さんに私で、よく編集会議をした。「社会福祉法人牧ノ原やまばと学園」の理事長の重責にある長沢道子さんのご紹介や、竹邑類さんの華やかなミニシカルショウと講演などを思い出す。



二代編集長 戸田博之(38回)
遊び 塾津子

たまるか、はや30号になつたかよ。僕が編集長やつたのは9号(一九八九)から14号(一九九二)までで、計算上は全体の5分の1と短い。けど、まっこと楽しかった。ほんとほもつとやりたかつたんやけど……。

最初の編集委員会では岩谷清水先輩と久々にお目にかかれ

た。まさかその3年後にお亡くなりなるうとは。いま岩谷さんと天国でもるもる土佐弁で話しゆつぞね。カラオケもやりゆう。あの頃は甲子園の応援やら、母校出身の代議士が5人になった祝賀会やら結構晴れやかなニュースが紙面を飾つたねえ。そついやあ幹事会で食中毒事件なんてのもあつた。サルモネラ菌じゃ。



「猿も寝らあ」には笑つたよ。これから楽しい「筆山」を発行し続けてよ。そのうち天国からインターネットで記事を送ろうかねえ。まてまて、開通したらまず第一に妻にメールせにやあ。「宏子ありがと」と。

前編集長戸田氏(38回生・故人)のブラジル行きで思いがけなく迷い込んで来た編集長の椅子であつた。ハチキン副幹事長、宍名主、鬼事務局長等、委員が名づつての口煩い

先輩達、やつと引き込んだ後輩は、自ら「酒呑童女」と豪語する元美少女では、編集から会計、雑務まで仕事が増えただけ。「後は頼んだぜよ」と言えず、出来るのは引き延ばし。何回か発行を遅延させ、とうとう更迭され、同窓会の皆様にも多大な迷惑をおかけしました。深く反省しております。



後任の西岡氏はパソコン、スキャナー、レーザー印刷、Eメール、HPをひっさげて登場し、紙面を刷新し、編集のスピード化を果たされました。IT革命は怖るべし。向陽新聞部で叩き込まれた職人芸はもはや無用の長物。老兵は消え去るのみ。同窓会は怖るべし。しかし、その怖さも自ら飛び込めば、いつの間にか快感に変わってくるから不思議です。来たれ、同好の若人よ!

ペンネーム役所工事こと前

編集長藤宗氏の副業(本業は筆山編集長)の設計事務所が、この長い不況期にも関わらずどついつうわけが繁盛しまくつて、本業を廃して副業に専念するといふことになって、鬼事務局長の命令一下編集長の重職のおはちがまわってきた。

残された編集委員は、ハチキン副幹事長、宍名主、鬼事務局長、役所工事、元美少女酒呑童女、元も今も美少女、バリバリの現役美少女Tさん等であつた。嗚呼何をか曰んや、我が人生はこれを転機に、30年続けた月給取り生活が副業になり、締切りが迫ると会社休んで編集作業をやる始末。ああ、この快感よ……。

ここ数年の急激な社会のIT化のおかげで編集作業が単純化されスピードアップできたのがせめてもの慰め。原稿集めは全てEメール、版下作成作業は完成形になるまでコンピュータの中でやり、最後の校正作業ではPDFファイルが各編集委員のコンピュータ間を飛びまわるという状況です。今後とも同窓会の皆様のご理解とご協力をお願い致します。

出版し

大原健士郎 (24 回生) 「とらわれる生き方あるがままの生き方」 講談社 六八 円
 竹内靖雄 「『日本』の終わり」 「日本型社会主義」との決別」 日本経済新聞社 七四三円
 中城正亮 (30 回生) 「さらば学校の世紀」 世界・子ども風景 成甲書房 一四 円
 田島征三 (34 回生) 「ひとのいいこと」 小学館 一四 円
 大橋一章 (36 回生) 「薬師寺千三百年の精華」 里文出版 二五 円
 野田正彰 (37 回生) 「国家に病む人びと」 精神病理学者が見た北朝鮮、バルト、ガリシアほか」 中央公論新社 一六五 円
 黒鉄ヒロシ (41 回生) 「坂本竜馬」 P H P 研究所 八三八円
 坂東真砂子 (51 回生) 「イタリア・奇蹟と神秘の旅」 角川書店 一一 円
 廣瀬裕子 (60 回生) 「衛星ヒジネス・ウォーズ」 (ゲリー・ドルシー著、高遠裕子訳) 日経 B P 社 二五 円
 「人生を変える 成功へのパワフル」 (リチャード・コッチ著高遠裕子訳) TBSブリタニカ 二 円

以下は雑誌に掲載された著作です。
 2002、2003 年のものを抜き出しました。

大原健士郎 (24 回生) 「現代日本の社会と自殺 (特集 増えていく自殺)」 教育と医学 48(5) p392-399 2000
 インタビュー 自殺は防止できる 第三文明 492 p32-35 2000
 「カウンセラーの資質」 刑政 111(11) p54-61 2000
 MEDICAL ESSAYS 執海(思想) 日本医事新報 3985 p66-68 2000
 公文俊平 (28 回生) 「講演懇談要旨 情報革命と企業」 経済人 54(10) p39-41 2000
 『「知業」を具体化するインターネット (総力特集 21 世紀型資本主義が見えた)』 エコノミスト 78(19) p69-71 2000
 「IT の出現は 100 年周期の第三次産業革命」 エコノミスト 78(55) p94 2000
 「21 世紀情報社会のパスポート」 運輸と経済 60(1) p29-36 2000
 「座談会 2000 年問題の教訓は何か?」 予防時報 202 p34-44 2000
 倉橋由美子 (29 回生) 「私の好きな」 ジョン・コルトレーン(Gaily Favorite Friends) 他」 波 32(8) p2-5 1998
 「小説を楽しむための小説毒本」 恋愛小説 週刊朝日 103(12) p174-181 1998
 島内英祐 (30 回生) 「世界の道あ・ら・かると スリランカの道」

中城正亮 (30 回生) 「いざなぎ流にみるアジアの神がみ (いざなぎ流の世界)」 道路建設 614 p3-10 1999
 季刊民族学 24(1) p93-97 2000
 島田裕之 (33 回生) 「施設利用高齢者のパラノス機能と転倒との関係」 総合リハビリテーション 28(10) p961-966 2000
 川島章弘 (33 回生) 「ルドルフ・シュタイナーの黒板絵のマルクメソディア性」 上越教育大学研究紀要 19(2) p525-536 2000
 田島征三 (34 回生) 「G3 処分場問題と闘うアーティストの記憶 木の實たちが語る日の出の木の遺言」 婦人公論 85(12) p80-83 2000
 「ルポタージュ 日の出の森からたより (特集 運動 その記録とその芸術性)」 新日本文学 55(7) p42-56 2000
 合田佐和子 (34 回生) 「対談 宙(そら)から落ちてきた天使」 太陽 37(8) p42-46 1999
 大橋一章 (36 回生) 「新疆の仏跡」 (特集 シルクロード・シリーズ (3) 仏教伝来の道) 文化遺産 10 p48-53 2000
 「新資料紹介」 新発見の石造彫形水盤について」 仏教芸術 250 p122-132 図表頭 99 2000
 野田正彰 (37 回生) 「医療過誤 疑問を口に出せぬ権威的組織療」の自覚なき病院 (追究 雪印事件は氷山の一角 日本の安全) 週刊タイムズ 88(34) p42-43 2000
 「台湾大地震被災地を歩く (特集 震災 5 年 命を守る体制はつくられたか)」 世界 67 p36-146 2000
 「大ロシア主義の落とし子」 ブーチン大統領に「忍び」寄る」 スターリンの亡霊」 Sapio 12(4) p86-88 2000
 「若者が接触するメディアの変化 (特集 1 若者のメディアライフスタイル 100代 200代はメディアにどう接しているのか) 宣言会議 607 p22-25 2000
 『規範なき』時代と子ども (特集 真に問題にすべきは、若い人たちが抱えている空虚感だ) (特集 規範なき』時代の子どもの心 (教育)』 総合教育技術 55(4) p14-17 2000
 『愚問を生む深刻な社会の病理 14 人が答える』なぜ人を殺してはいけないのか? 子供に聞かれたら? 子供の愚問』では済まない時代! 親は What's the Answer?』 文芸春秋 78(4) p75-177 2000
 『幸せな精神分析学者 フロイト』 (特集 20 世紀の巨人) は死んだか?』 新潮 45 19(12) p76-82 2000
 『対論 コーボレット・パイオレンス』 『一人一人の社員』と社内鬱人間』に注意せよ』 プレジデント 38(13) p120-127 2000
 『FOCUS 戦後日本人のこころと老人ケアの本質』 作業療法ジャーナル 34(9) p893-899 2000
 柿田睦夫 (38 回生) 「科学の散歩道 オカルトと「信じる」世代」

塩田潮 (40 回生) 「混沌・政局解剖 首相が嘔しめるべき」の格闘」 世界週報 81(11) p38-39 2000
 「日本人再発見 (22) 池田成彬 (第一回) 戦前の財界で最大の力を発揮し軍官支配体制のスタートを担った」 エルネオス 6(1) p70-73 2000
 「日本人再発見 (24) 池田成彬編 (3) 福沢諭吉と」 エルネオス 6(3) p88-91 2000
 「とくとく違った世界観」 社会観 人生観を離反」 エルネオス 6(3) p88-91 2000
 「混沌・政局解剖 新年政局動が 2 人のキーパーソン」 シリーズ日本人再発見 (23) 池田成彬 (2) エルネオス 6(2) p82-85 2000
 「日本人再発見 (25) 池田成彬 (4) 戦時経済体制にも安易に妥協せず自由主義者として志を貫く通人」 エルネオス 6(4) p88-91 2000
 『特別研究 崖う縁に立たされた落日の政治家 小沢一郎』 奇跡の復活へ 初心貫徹で決断決戦の軌跡」 エニリーター 13(2) p59-64 2000
 「永田町対談 (2) 新しい政治を創るため自民党は総点検を」 財界にこそばん 32(11) p18-23 2000
 「塩田潮の永田町対談 (3) 岡田克也 (民主党政務調査会長) 強い経済と社会的公正の両立が民主主義の根幹だ」 財界にこそばん 32(12) p14-19 2000
 「永田町対談 (4) 参院選に勝ち安定した政権作る」 青木幹雄 (参議院自民党幹事長) 財界にこそばん 33(1) p24-29 2001 [23-1016]
 黒鉄ヒロシ (41 回生) 「いすれ辞書に載る (テーマ・エッセイ) 長嶋茂雄監督論」 Voice 275 p38-40 2000
 森崎初男 (41 回生) 「経済学・経済政策」 (コンサルタントコース・管理と診断のポイント講座 (特別編) 中小企業診断士 新試験制度ガイダンス 新試験科目の内容と学習法【ポイント解説】) 企業診断 47(10) p108-110 2000
 宮岡等 (49 回生) 「要介護認定の一次判定と主治医意見書の問題点 (特集 精神科医のための介護保険)」 老年精神医学雑誌 11(9) p1000-1004 2000
 『日常臨床でみられる精神症状の見方』 (特集) 『研究と報告』 日本東洋医学雑誌 50(4) p613-653 2000
 『うつ病患者における持続・維持療法について』の検討 (第 2 報) 精神医学 42(9) p939-944 2000
 阿部知曉 (51 回生) 「イギリスのハウレット」 野生動物園における「リラ飼育環境」 霊長類研究 15(2) p305-311 1998
 『野生コリラの保全計画と活動団体』 霊長類研究 15(2) p193-198 1998
 坂東真砂子 (51 回生) 「私の好きな」 性」 図書 618 p18-21 2000
 「一発の弾丸が村を殺した」 土地を飲む」 淡交 54(10) p12-15 2000
 「わたしのお茶時間 (9) 波 34(6) p2-5 2000

前衛 691 p158-160 1997